<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>一本の綱（セイ）としての人間  ニヒリズム状況下に於ける  人間と社会の問題</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>吉川 康夫</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>近世哲学研究 1997年12月20日 4巻1-2号  岐阜大学出版部</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>1997-12-20</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/189798">https://doi.org/10.14989/189798</a></td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>Textversion</td>
<td>publisher</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Kyoto University
一本の網（Sei）としての人間

ニーチェが、ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題

吉川 康夫

序

ニーチェが、ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題

ニーチェが、ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題

ニーチェが、ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題
１．ニヒリズムの何が問題なのか

（A）ニヒリズムという観察

ニヒリズムは、人間の思考力に於いて動物なり方から決定的な一步を踏み出していたものが、現在の人間どう見られるかを議論して来る。ニヒリズムに於いては、他方のものや他人のもの、他者の見方を明らかにしつつも、他方のニヒリズムを明らかにしている。そこで、ニヒリズムは、他方の見方を明らかにするため、他方のニヒリズムについての明確な観察を求める。
3/～本のオシメ（Sell）としての形

～对于本的说明（Sell）作为的形式～

～对于本的说明（Sell）作为的形式～
5/1 一本の冊（Siel）としての扱い

日本最大の歴史学的図書館である国立国会図書館は、『国書の歴史』に「国書」を含む項目を設けている。これにより、国書に関する研究が進んでいる。国書は、内容の正確さと、文書の形式の多様さが特徴である。国書は、日本の歴史を反映するもので、その歴史的価値が高まっている。国書についての研究は、歴史学、文書学、文学史、思想史など多くの学問分野で行われている。国書の研究は、歴史の理解を深めるうえで重要である。
講義: 電解水素と酸素の生成。

(1) 電解水素

电解水素

(2) 電解酸素

电解酸素

(3) 電解水

电解水
7/一本の網（Seil）としての人間
開いてゆけば当然認められねばならぬ事態ではないか。人

①ニーチェの克服の道

Ⅰ克服対象としてのニーチェ

Ⅱニーチェの克服の方途

（A）克服対象としてのニーチェ

した見解は採らない。ニーチェ

一本の網（Sei）としての人間／8
この議論は「見ることを特に説得力を持つように思え
る者あるが、その生を否定するのには矛盾でもあり本末転
倒でもある。従って人間には、生を全面的に肯定する資
格もないし、それ以上に生を断罪する資格などないと言われ
そうだ。だが問題は、その次に続く「症候」は判断可能で
ないか、これが潜在意識ないし言語化されていないため
ある。《ニーチェ自身、仏は上昇と下降の兆候にこれまでは誰も
持たなかった》という表現である。

ニーチェは判断基準は実によく切れる刀であり、サクラタス
ワーグナーも、民主主義も社会主義も「生の下降の兆候」
即ちデダニムとして切り捨てられてしてしまうことになる。

ニーチェは判断基準の喪失というニヒリズムの中で、
かくも銳利な基準を持ち得た。そして彼はその基準を根拠
するにあたり、否、より正確に言うなら、ニーチェの《力への
意志》という基準から「力への意志」を柱とする「力の哲
学を作った。」
力の増大を企てることができる。その力への意志が低いレベルでしかないことは決してその力への意志に責任があることではない。それは世界は、様々な力への意志がそのまま影響して解釈した世界像を対立した抗争になり、しかもそれがそれを解釈した力への意志に有るものであるから、断固としてそれを主張せざるを得ぬものである。これはニヒリズムへの意志を論ずるとき念頭に置かれていないのは多くの場合、人間という動物種全体のあり方であるということ。しかし例えば、私が生あるものを見出したところ、そこに私は力への意志を見出した。そして奉仕する者の中にもなお主人になろうとする意志を私は見出したのだ。(Ta. von der Selbstüberwindung)

「人間が欲するものを、生きた有機体のあらゆる最小部分が欲するもの、それは力の増大である」という言葉に見られるように、個々の人間も自らの力に応じて、更なる力の増大を企てられる方をと見られてい
実に耐えるほどに成長し得たから、実見方の可能性に
なるのである。彼が生に敵対するものとして断罪されてしまう
かったクリスマス教徒を、人間が己れを人間として権威を
生きることを敵視しないように、当時の力への
意志の「保存手段」であったと見なし、「実践的並びに理
論的ニヒリズムの偉大な対抗手段」さえ考え、これに
事実我々もはや最初のニヒリズムに対する対抗手段を
それぞれ必要としていない。我々のニヒリズムに対する力
は、生の必要としていない（』』を重ねれば、ニヒリズ
ムを肯定的に捉える見方があれば、これ
のかも知れない。しかしこの解釈を、力への意志という形
で、生という基準を立て、認識を生に従属させることに
よって、これが見方くなった。それによってニヒリズム自身が現実に
するための仕掛けた数々の戦いもまた自己克服されたよ
うに映る。世界は『諸力の巻れ』（』』に過ぎ
ないのだから。そこには様々な感情に囲まれながら渡りぬ
かないのだから。}
人間はそのような問題を抱えているが、それが本来の生とは異質なものである。そのために、思考能力が欠如しているからである。認識理論においては、人間の理解を深めるための道筋を立てることに集中する必要がある。

人々はそうした考え方に同意するだろう。しかし、そのような考え方は、人間の本質を誤解するのではなく、生の観点をより深く理解するための手段である。それに従うと、人間の思考能力は、またまた、人間の本質を理解するための鍵となる。
様々な力への意志の具体的な相互関係は一つに明確にされない場合に終わっている。それは生が、成長を衰えもあり
うる問題を持つものとしてではなく、成長への意志として
一元化されたために、諸力の戦い——以上に表現する
ことができないからだと思われる。しかし人間の認識
においては、この断片が示唆するように、結果的に知らな
ければよかったと思うだろう。なぜ見えてしまった場合
にさえ、「この認識の不可逆性を言うべき事態が生じる
のである。

（B）認識の限界を教えるヒルズム

「そのようなことが起こるのは、一つには人間の思考能
力の発展が様々な認識のレベルを開くからである。また一
つは人間の認識も社会性を持たざるを得ぬからである。

後者は言葉に一言すると、例えば人間はその生活過程で自
らの属する社会の価値観や世界観に色濃く染め上げられてお
る。確かな青年期に於いてそれらとの批判的葛藤の中で自
らの見方を練り上げていくにしても、その場合の土台や核

『一本の網（Seil）』としての人間／16
一本の冊子（下巻）としての入鏡 / 18
命体たる人間が、自らの楽しみの中で脳が必要とするなら、脳の働きを解明しなければならないのである。それは自らの生体解剖にも等しく、そんなことをすれば（私）は益々虚をさまようことになるのではないか。原因力の発見や脳の病気の治療など、どこまでも副産物にすぎない。人間の知的好奇心が、まるで脳大化した脳が、定向進化的な勢いで更なる理解を求めて突き進んでいるのである。

それによって開けてくる世界が人間に豊穣をもたらすことは限らない。人間の、各人の空中分解されでさえあれば、それぞれの自我像や世界像を真理として、そこに生じたあらゆる方観で手を打って、まずまず妥当なく、まるで脳大化した脳が、定向進化的な勢いで更なる理解を求めて突き進んでいるのである。

それゆえにヒルツムは一つの生命力へ期待を託すしかなしに、その上に可能な展開を模索するしかない。「種々の自己や世界を自ら絶対とする生命力へ期待を託すしかなしに、シコーチャー」という保証はどこにもない。そのハババーフェンが「私の摘」との言葉の中には、種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉の中に、「種々の危険が列挙されているのに、「本の網」の言葉中に
結語
本稿はニーチェが示したニヒリズムという概念を取り出し、それは克服すべき対象ではなく人間の認識が闇く地理に過ぎないという立場から書かれた。そうした視点から見ると、最初に提起された時代の顧問はいかに映るだろうか。

まず現実問題として、既にプルジェやニーチェの時代にかかわる危険視された時代の方向がその後の百年間で本当に生の衰弱化と見なさざるを得ぬ経過を辿ったのかを考えれば、無論概ねという語は欠かせないにしても、彼らの思いが充実に過ぎなかったと言えるだろう。

確かにファシズムの野蛮な第一、問題がなかったと決して断言できない。だが民主主義は何とか機能しているし、科学は PSTT として単なる結果にたらない認識能力の過大な発達が更なる冒険を強いているに過ぎない。知的であることが構造的にもたらすニヒリズムという冒険。それは人間にける「一本の絹」たるしめに入る。

 PyQt はニーチェが示したニヒリズムという概念を取り出し、それは克服すべき対象ではなく人間の認識が闇く地理に過ぎないという立場から書かれた。そうした視点から見ると、最初に提起された時代の顧問はいかに映るだろうか。

まず現実問題として、既にプルジェやニーチェの時代にかかわる危険視された時代の方向がその後の百年間で本当に生の衰弱化と見なさざるを得ぬ経過を辿ったのかを考えれば、無論概ねという語は欠かせないにしても、彼らの思いが充実に過ぎなかったと言えるだろう。

確かにファシズムの野蛮な第一、問題がなかったと決して断言できない。だが民主主義は何とか機能しているし、科学は PSTT として単なる結果にたらない認識能力の過大な発達が更なる冒険を強いているに過ぎない。知的であることが構造的にもたらすニヒリズムという冒険。それは人間にける「一本の絹」たるしめに入る。
切な対策を施されぬままに事態が悪化してゆく可能性が予想される。個と全体という問題が、ニヒリズムに於いては、理解的に原子的な個に解体されていき、全体の方向づけが行われ得ないまま崩壊していく危険性である。

だが、その危険は拡大し得ないために、既に神の影を立てるわけにはいかない。とすれば、ニーチェが言語の限界を認めつつも当の言語を駆使して認識を誤る例に習うかのように思われる。つまり彼は、言語は真相解明の手段なり得ぬことも、完全に伝達可能性は持たぬこと知りつつ、それでも少しばかり伝達可能であるという部分に賭けただと言われば、他人として共に認め合えるもの、共有可能なものを取り出し、それをルール化する手段として、有用性として、限界あるものとして自覚されている上、そういったものを組み出す試み、それは普通性を絶対性を持たぬため、常に種々の異議に晒され、動揺を免れないだろう。が、それはニヒリズム状況下では当然のことである。多くの危険、多くの動揺に晒されながら、そうい
ている略号なので以下に列挙しない。テキストフォーマット番号を付し
せてグリコフ版の巻および頁を示し、論稿に関じては巻及び断
章番号を示した。

ている略号なので以下に列挙しない。テキストフォーマット番号を付し
せてグリコフ版の巻および頁を示し、論稿に関じては巻及び断
章番号を示した。）

ている略号なので以下に列挙しない。テキストフォーマット番号を付し
せてグリコフ版の巻および頁を示し、論稿に関じては巻及び断
章番号を示した。

ている略号なので以下に列挙しない。テキストフォーマット番号を付し
せてグリコフ版の巻および頁を示し、論稿に関じては巻及び断
章番号を示した。）
いまの状況を踏まえた上で、我々は、

「生命の価値」という概念をどこまで

拡大すべきかを、我々は、

哲学的な側面を含め、

科学的な側面も含めた、

総合的な視点から検討

する必要がある。

（注）特に、生命の

価値を重視する立場の

考え、特に科学的な

視点を含めた、総合的な

検討が必要である。
Der Mensch „als ein Seil“ — Die Problematic des Menschen und der Gemeinschaft unter nihilistischen Umständen —

Yasuo YOSHIKAWA


Le Doute Cartésien
d’après les Objections et Réponses des Méditations

Masato ANDO

Qu’est-ce qu’on peut avancer sur le doute cartésien d’après les Objection et Réponses des Méditations? Nous pouvons soulever trois problèmes. 1) Est-ce que le doute cartésien est artificiel? 2) Est-ce que la dissipation d’un doute nous permet d’acquérir une vérité évidente? 3) Descartes, a-t-il tout doute dans la 1ère Méditation?

1) Dans les 4èmes Objections, avertit Arnauld que le doute cartésien est dangereux pour les faibles esprits, et que nous ne devons pas douter sérieusement. Descartes accepte ses conseils. Mais ailleurs il dit également que le doute est utile pour parvenir à une ferme et assurée connaissance des choses, et espère que nous employons quelques mois, ou du moins quelques semaines, pour lire la 1ère Méditation. Le doute n’a-il pas besoin d’être sérieux pour être valable?

2) Dans la Réponse aux 3èmes Objections, éclaire Descartes la utilité des raisons de douter: il s’en est servi en partie pour y répondre dans les Méditations suivantes. C’est-à-dire, pour parvenir à la vérité évidente, Descartes projette de dissiper les raisons de douter. Être évident, c’est être indubitable. Mais ce projet est-il valide sans conditions?

3) Nous recueillons des matériaux pour discuter sur la portée du doute cartésien. Dans les 2èmes et 6èmes Réponses, rend Descartes compte des choses qui ne sont jamais doutées.